

非暴力平和隊・日本 (NPJ) ニューズレター

第 26 号 2008年 12月 12日発行

〒113 - 0001 東京都文京区白山 1 - 31 - 9 小林ビル 3 階

Tel : 080 - 5520 - 3077 E-mail : npj@peace.biglobe.ne.jp

Fax : 03 - 5684 - 5870 Website : <http://www5f.biglobe.ne.jp/~npj/>

Nonviolent Peaceforce Japan Newsletter

▪ 【巻頭言】 辺野古での非暴力行動と阿波根昌鴻	共同代表	大畑豊	2
▪ 離脱? 地に足をつけて	事務局長	安藤博	4
▪ スリランカ報告	スリランカ FTM	徳留由美	6
▪ 2009 年 1 月 24 日イベント予告			11
▪ 国際理事報告	国際理事	阿木幸雄	12
▪ パレスチナ 1948・NAKB の製作に携わって	会員	中原隆伸	14
▪ NPC との交流などについての報告	理事	奥本京子	16
▪ インド滞在記	会員	李 亘	16
▪ 非暴力平和隊に参加して学んだこと	理事	大橋祐治	18
▪ NPJ 2008 年の活動・イベント			20
▪ NP 2008 年の出来事			22



少年と徳留由美さん

辺野古での非暴力行動と

阿波根昌鴻

NPJ共同代表 大畑豊

辺野古での非暴力トレーニング

2004年4月から始まった沖縄県名護市辺野古での、米軍新基地建設反対の座り込みがまもなく1700日になろうとしている。4年半以上もの期間、一日も休むことなく座り込みを続けている。座り込みと言っても地面の上のみならず海上（海中）に作られた建設作業用のヤグラ上での「座り込み」も相当の期間続いた。南国沖縄とはいえ、冬季強風の吹く海上はかなりの寒さだ。巨大な作業船相手に小さなカヌーで漕ぎ出して行って阻止したこともある。

私も数度、陸上・海上での座り込みに参加させていただいたことがあるが、今年10月には座り込みに参加するメンバーから依頼され非暴力トレーニングをおこなった。座り込みを始めた初期にも一度非暴力トレーニングをおこなったことがあるが、メンバーはほとんど入れ替わっている。日々非暴力直接行動を実践している人たちにトレーニングをする、というのはおこがましく、こちらが反対に教を請いにいくべきなのだが、お互い学び合えるいい機会としておこなわせていただいた。

依頼主は忙しい活動家だ。旧知の仲とはいえ、事前の打合せもままならぬまま、沖縄に着いた。現地に向かう車の中での打合せ。「非暴力について話してほしい」とのことだった。

彼女が言うには、自分たちはとにかく

非暴力ということで、作業員に触れない、罵声を浴びせないなど数項目の約束事は決めているがそれ以上のことはわからない。これまでの活動で出てきたいろいろな問題を解決するためにも改めて「非暴力」ということについて考えたい、とのことだった。

打合せを兼ねて最近の活動状況を聞いてみると、どうも仲間同士のコミュニケーション、意思決定過程に問題の一つがあるようなので、私が活動していたピース・ブリゲイド・インタナショナルでの経験とそこでの物事の決め方、NPでの会議の仕方などについて話した。

とは言っても、そんな特別なことを話したつもりもなく、こんな話でいいのかな、と思っていたら、現地では「筋金入り」の活動家が「話し合って重要なんですね」とぽつりと感想をもらした。頻りに座り込みのメンバーがかわり、前任者の経験を新人が引き継ぐ余裕もなく、常に緊急体制をとっていた中では丁寧な話し合いよりも、「大きな声」が通る、ということもあったようである。

その後、非暴力トレーニングの手法で辺野古の活動の良かったところ、改善すべき点について感想や意見を出し合った。

のちに、参加者の一人の感想として「トレーニングの中での『人の意見を非難するようなことは言わないように』との助言があり、自由に発言することができなかった」と主催者から伝えられた。

自分たちNP・NPJもお話ししたような理想的な話し合いが出来ているわけでもないがと、もちろん断っておいたが、自分を振り返り、どれだけ丁寧な話し合いを

心がけているだろうか、と反省するいい機会ともなった。

「沖繩のガンジー」阿波根昌鴻

辺野古の座り込みのテントには「沖繩のガンジー」と言われる故・阿波根昌鴻（あはごん しょうこう、1903～2002）さんの大きな写真が掲げられている。私が阿波根さんの設立された「わびあいの里・反戦平和資料館」（伊江島）をお手伝いするようになってからかれこれ15年以上になる。沖繩で毎年おこなわれている平和祈念行脚（日本山妙法寺主催）に当時参加しており、わびあいの里に毎年立ち寄っていたのだが、それが縁となった。庭仕事・掃除に始まり、資料館の維持管理、機関紙の編集などの事務仕事をするようになった。しかし、私が手伝うようになったころには阿波根さんはすでに車椅子の生活になっておられ、阿波根さんの右腕でもある謝花悦子さんの仕事を手伝いながら、その合間あいまに彼女から阿波根さんのことをいろいろ聞いた。

阿波根さんは、人間にとって大切な食べ物をつくる農民が歴史上搾取され続けている、農民こそが勉強しなければならない、と農民学校をつくることを夢見て少しずつ土地を買い求めていたが、八割方できていた学校は戦争で破壊され、一人息子も兵隊にとられ戦死した。戦後、再建に取り掛かるまもなく今度は米軍によって軍用地として土地は接收され、平和と土地を取り戻す運動が始まった。非暴力に徹したその運動により、伊江島で軍用地としてとられた土地の多くを取り戻した。

しかしながら、阿波根さんの土地は現在も米軍基地として使われており、農民学校の夢を果たすことなく旅立たれた。しかし最期の瞬間まで学校建設のことを語り、あきらめてはいなかった。

「わたらの平和運動は、沖繩から基地を無くしても終わらない」世界全体が平和で平等な社会になるまで平和運動は続き、そのためには「何か特別なことをするのが平和運動ではない。悪いことだけはしない。生活の場から平和をつくりだしていく」ことだと語る。

阿波根さんの実践と思想から学ぶことは多い。阿波根さんの言葉をとおり現在の社会や平和運動、私たちの生活を見直してみることは今とても重要な意義のあることである。

1月24日の会合（別項参照）ではそんなことを皆で話し合えたらと思っています。（参考文献：『命こそ宝：沖繩反戦の心』岩波新書、阿波根昌鴻・著）

【ご支援を】

辺野古、そしてやはり新たな訓練施設が作られようとしている高江では「一日でも、一時間でも、一緒に座ってください」と支援を求めています。地元新聞では毎日のように報道されてますが、全国紙ではなかなか記事になりません。下記サイト等をご覧ください。

辺野古浜通信

<http://henoko.ti-da.net/>

高江の現状 <http://takae.ti-da.net/>

離脱？地に足をつけて

事務局長 安藤 博

「非暴力平和隊本部から離脱したらどうです」—わたしたち日本の非暴力平和隊（NPJ）の活動を、より活発にしていくための方策を求めて、NGO の先輩たちに対して 2008 年夏に行なったヒアリングのなかで、年の瀬を迎えたいま、この言葉を思い起します。もちろん、「離脱」が現実的、具体的な策になるというわけではありません。NPJ は、NP に下部組織として従属しているのではないので、そもそも「離脱」ということはあり得ません。ただこの言葉は、設立から 5 年を経た NPJ の今後を考えるよすがにはなるでしょう。逆説的ですが、自立性を高め、地に足をつけた活動に力を入れていくためのバネとしてです。

「NPJ の今後」を改めて考えねばならない状況になっています。NP 活動はどうか。スリランカは行き詰まりと言わざるを得ない、NP 組織は創立メンバーから世代交代にかかろうとしている。世界に目を転ずれば、米国・インドの原子力協力協定を機に核不拡散条約体制（NPT）は事実上崩壊し、北朝鮮、イランの核兵器開発阻止は望み薄となった。日本の安全保障・軍事のプロたちはそのことを強調して「日本の核保有」を模索する動きを強めている。たとえば非核三原則のうちの「持ち込まず」を崩し、米国と共同の原子力潜水艦搭載核ミサイルを導入するこ

となどを・・・

「NPJ は何をするのか」に関して、わたしたちの間では「スリランカなどでの NP 現地活動の後方支援をするだけの組織ではない」と、いつも言ってきました。それでは、後方支援だけでない「何をするのか。2008 年初めから約半年の検討作業を経てまとめた＜NPJ 中期計画（2008-2012）＞（2008/6/16）は、とりあえず以下のようにその「何か」を記しています。

「スリランカなどにおける NP の現地活動を支え、また日本が米国との軍事行動一体化や自衛隊戦地派遣の常態化などによって平和憲法に悖る軍事・暴力に傾斜していくことのないよう、『非暴力平和』を日本の社会に広げ、定着させていくことに務める」と。

日本は、スリランカ、パレスチナ、イラク、アフガニスタンのような紛争地ではありません。南北に分断された朝鮮半島のような緊張感もありません。しかし、日本に暮らす自分たちなりに「現場」を持つとういうわけです。たとえば沖縄には、日本が世界に誇るべき平和憲法に反して、世界最強の米軍を半世紀以上にわたり駐留させていて、そのことに伴い、基地周辺住民の「人間の安全保障」は著しく損なわれています。

NPJ メンバーの多くは、それぞれにご自分の本領、現場を持っておられます。たとえば、大畑さんは、本号ニューズレターで記されているように「沖縄」です。

奥本さんは、平和学のヨハン・ガットウングにつながる「Transend」活動。また、小笠原さんは「人権擁護」を。

こうした NPJ の他のメンバーに比べて、わたくしは自分の本領、現場というべきものがあやふやであることに思い至りません。市民活動は、四半世紀前「情報公開法制定運動」に関わったのに始まり、「行政改革」、「憲法」とつながりを重ねてきました。つまりは、いかにも集中力を欠いた活動と言わざるを得ません。

2006 年後半からの約 1 年半は、＜9 条世界会議＞（2008/5/4-6、幕張メッセ、広島など全国 4 会場）のため、ひと集め、募金活動の一端を担ってきましたが、終わって半年、なにか遠い昔の出来事のようにも思えます。2007 年夏からは、「雑用が世界を救う」と“大言壮語”して、毎週＜9 条グッズ＞売りの準備などを続けていました。＜世界会議＞記録の書籍、DVD の販売などを、いまも続けています。しかし「憲法」はかつてと同じように、床の間の飾りものに戻ってしまった感があります。「9 条」は、一時の付け焼刃だったかもしれません。

本領を持たない“浮草”だというなら、それこそ NPJ を持ち場として＜事務局長＞に専念しろ—皆さんにそう言われそうです。そうですね、そういうことになりそうです。であれば、改まって「そもそも何をするか」と大きく構えるまでもなく、前号ニュースレターの巻頭言には＜会員拡大戦略＞の課題を列記しています

（NPJ/NL 第 24 号、巻頭言「雑用が世界を救う」参照）。なかでも、懸案の「ウェブサイトの実践」。また、「賛同人への活動報告」も宿題です。これらを実行せずに年を越してしまうのは、一種の公約違反でしょう。

そうした中で、年明け間もなくの 1 月 24 日、大畑さんを講師として開催される市川市での集会（＜いま、世界平和を創り出すために ガンジー、阿波根昌鴻に学ぶ＞）には、当面もっとも力を入れねばなりません。この集会は、＜9 条世界会議＞の NPJ ワークショップ（「紛争地で活かす 9 条」）の盛況（参加者 100 人超）を一過性のイベントに終わらせることのないようにと、各地で逐次重ねていこうとしている集まりの一つです。

わたくしの自宅近くへの我田引水的集会でもあります。あの幕張メッセワークショップが、＜世界会議＞の賑わいを借景としたその場限りの盛況であったということになってしまわないよう、生命保険セールス並みに“親類縁者”の動員もしましょう。

NPJ メンバーそれぞれの「現場」活動を、NPJ 組織の活動として集約し、広く伝えていくことが、事務局長としての本来の務めでしょう。ただ、先ずはわが地元で NPJ の存在を明らかにする、大畑講師のガンジー節・阿波根節で聴衆を魅了し NPJ 会員を 20 人ほど増やす—新しい年に向けて、さしあたりはこれがわたくしの「現場」活動というわけなのです。

<2007年末からスリランカ活動チームに参加しておられた徳留由美さんが、2008年末までだった契約を更新せず、帰国されることになりました。このことを伝える徳留さんのメールを、12月3日に安藤からNPJメーリングリストで皆様に転送しています。このメール、並びその前後のメール連絡を、徳留さんからの「スリランカ報告」としてニュースレター用にまとめました—安藤博>

Tue, 11 Nov 2008

一步前進、難問山積

10月末の28日にコロンボの電力施設が攻撃された時には、たまたまコロンボに滞在していました。病院に行く必要があったので、4日間ほど滞在していました。NPのゲスト・ハウスに泊まっていたのですが、電気が止まり、蚊の攻撃と暑さで「また停電だ・・・」と不満を抱いた夜でしたが、次の朝になり事件を知り、自分自身をアイロニックに感じてしまいました。安全のために、コロンボ全域が停電になっていたのですが、そうとは知らず・・・、なんとも皮肉な気持ちです。爆撃が落とされた場所に近いところにながらも、そのことに気づかず、暑さと蚊で寝苦しいのに不満を抱くなんて…。人間の感情とは不思議なものです。

私は次の日の朝、この事件についてトゥクトック（3輪オートバイ）の運転手

から聞きました。事件の後だというのに、人々は普通に行き来している。紛争の中で生活する。紛争と共に生きる。北で起きている紛争は対岸の火事のように感じている人もコロンボ市内にはいるのではないかと、そういう思いにもかられました。

トリンコマリー市内でも、漁業の親方みたいな男性が数十発もの銃弾を浴びて殺されました。彼の家は海軍と警察のチェックポイントの中間位置（お互いに近い場所です）にあるというのに、家の前で銃殺されました。他にも不特定のグループに殺される人達、誘拐される人達も増えています。トリンコマリー市内にある国内避難民所も軍の一斉調査を受け、11人の人達が連行されました。

NP戦略計画ディレクターのティム・ウォリスがフィリピンへと出発しました。彼が滞在している間に、なんとしても地方行政官と話をしてもらいたいと願っていました。ティムも積極的に動いてくれて、先週の火曜日に話し合いの場を地方行政官と持つことができ、3ヶ月の閉鎖計画が認められました。

その日は私は朝早くからムートル・オフィスに行っていました。オフィスの備品を全てトリンコマリーに移動し、正式にオフィスを閉鎖する為にです。オフィスから全ての物を移動した後は、「この

オフィスの歴史が終わったんだ」と少し感傷を覚えました。ムートルの地域担当官にも挨拶し、また平和委員会の代表の人にも会い、3ヶ月計画の中には平和委員会との活動も含まれている旨を伝えました。

ようやく一歩前へ進んだ感じですが、問題は山積です。全てが明確ではありません。誰が交代要員で来るのか？3ヶ月の計画が受理されたのですが、本格的に活動をし始めるにはコロンボのプロジェクト・マネージャーの了解を待たなければなりません。しかし、本来なら今週来るべき彼女も、コロンボの事情で来る予定もありません。

現地スタッフも、このような状況の中において、明確なコロンボの意思表示が足りないせいか、常に同じ質問をします。「3ヶ月後にGAが残ってもいいと言ったら、プロジェクトを継続するのか？」、「12月で皆の契約が切れるが、誰が残って、誰が辞めなければならないのか？」などなど……。私が答えられる問題でもないので、心理的に辛く、フラストレーションと闘っています。

本当にこれからどうなるのでしょうか？私の住んでいる家は、契約が11月末には切れるので、私は移動を強られる事となります。自分自身、いつ何処へ移動するのか分からない状況です。

とにかく、全ての事において、早めに安定性が生まれることを願います。

NPの方針や、基本的なアイディアには賛成し、仕事内容も自分がやりたい事なのですが、FTM（現地活動要員）としての仕事以外の事で悩まされるのが現状です。

Fri, 21 Nov 2008

スリランカを離れます

地方行政官が3ヶ月間計画を承諾したのに伴い、トリンコマリー・スタッフの縮小も始まりました。私はおととい、水曜日にコロンボのCRT (Colombo Response Team: コロンボ緊急対応チーム) へと異動になりました。

この移動の連絡は予期していたとはいえ、とても急なものでした。先週の中ごろにプロジェクト・マネージャーから突然「いつコロンボへ移動できるのか、来週移動できるか？」との連絡が来て、「それは、あまりにも急すぎるので、せめて水曜日に移動させて下さい。荷物の整理も必要です」と願い出て、ドタバタと水曜日に動きました。

現地スタッフとの別れの悲しさを抑えながら、移ってきました。荷物もあったので、ムートル・トラックを利用して、

トリンコマリーから直接コロンボを目指しました。途中、車のクラッチ・ペダルが壊れ、立ち往生してしまう事態にも陥り、「どうしてこんなことが・・・」と悲観的になりましたが、夕方の5時を過ぎていたのに、運よく修理屋を見つけることができ、路上で緊急の整備をすることができました。コロンボ・オフィスへ着いたのは夜9時前でした。雨の降る日だったので、無事に修理ができ、ほんとうに助かりました。

昨日は同僚と将来について話しをしました。自分の中でもトリンコマリーの問題が中途半端に停滞している間に、「12月で辞めよう。更新はしないでおう」という気持ちが生まれていました。この停滞の間にも、いろいろな問題に対して懐疑的な感情しか持てませんでした。現地スタッフとマネージメントの間に挟まれ、心理的に疲れてしまいました。

昨日正式に、スリランカ国内ディレクター（代理）へと更新をしない意向を伝えました。彼女は私の状態も理解してくれ、また健康面でもストレスや心理的な部分で影響を受けているのも知っているので、納得してくれました。

新しいディレクターが12月から活動を開始します。彼が良いリーダーシップを発揮し、内部が安定し、公平な秩序を生み出す事を願います。そうなれば、将

来戻って来たい気持ちも、もちろんあります。



少年と母親

私がスリランカへ来て初めてなじみになった少年に、つい2週間前会うことができました。約1年ぶりに、少年が暮らしている先を訪ねたのです。少年は私と通訳を見つけると、走りよってくれました。前はシンハラ語を話すことができず、周りのシンハラ人の子供達から嫌がらせを受けていましたが、それを見事に克服しました。一緒に居たシンハラ人のドライバーと流暢にシンハラ語で会話をしました。ドライバーも少年の成長を見て、私と同じように嬉しそうでした。

少年の成長を実際に感じ、見る事ができ、とても嬉しく思いました。彼を預か

っている保護者は、とても厳しい人ですが、心の温かい包容力のある人です。少年を特別扱いする事はしませんが、特別な思いで彼に接しているのです、その気持ちは彼にも届いているのでしょう。彼もそれに答えて勉強を頑張っているようです。

保護者がこの少年の将来の事も考えていてくれているようで、私は安心しました。

1年前のオドオドした、笑顔の無い少年が、笑顔で走りよってきてくれたのには本当に感動しました。その時にも、「彼の無事を目で確かめることができました。心残りはない・・・」と感じました。

たった一人の少年の成長ですが、私にはとても大きな意味がありました。

もう一つ、スリランカを離れる前にどうしても行きかけた場所へ、念願のバイク・ツーリングで行くことができました。世界遺産のシギリアへと行くことができたのです。

私が日ごろからバイクでシギリアへ行きたいと言っていたので、現地スタッフが休みの日曜日にもかかわらず、連れて行ってくれました。私の国際免許はバイク運転ができないので、後ろに乗って片道3時間の日帰り旅行でした。

日本の道路とは違うので、夕方戻ってきた時にはお尻が痛かったですが、良い思い出となりました。シギリアも本当に素晴らしい場所でした。一番高いところまで上り、頂上から眺める景色は格別なものでした。

少年に会い、念願のシギリアへも行くことができたので、良い思い出を増やすこともできました。この状態でスリランカを離れるのが、良いのだと感じました。

NPJの皆さんの期待に反して、2年間勤め上げることができず、申し訳ありませんでした。しかし、この決断がプラスの要因を生み出すきっかけとなる事を祈ります。

今は次の仕事は決まっていませんし、就職活動を始めなければなりません。しかし、年末年始は家で静養したいと感じています。その間に仕事が見つかったら嬉しいですが、一時休養が必要だと体が訴えています。良い仕事の巡り合いに出会えることを祈ります。

仕事が見つかったら、また積極的にNPJの活動をサポートしていく事も可能であると思います。早く次ぎのステップが見つかるように、どうか見守っていて下さい。

本当に NPJ の皆さんにはお世話になりました。感謝しております。励ましのメールなどもありありがとうございました。

これからも、微力ながら、NPJ の活動の手助けができたらと願います。

日本へは 12 月 20 日に戻る予定です。それまでは、CRT の仕事を一生懸命頑張ります。最後の 1 ヶ月が良き経験と思いつい出になるように、ポジティブに活動していこうと思います。

勝手な決断ですが、どうかご理解いただけたらと願います。これからもよろしく願いいたします。

Fri, 28 Nov 2008 02:14:

同行が続く

CRT の仕事は毎日の様に同行が入ってきます。ジャーナリストの人や、ビザ申請をしたい人、飛行場への見送り。他のオフィスからの依頼人の同行など。残りの時間を頑張ろうと思います。

Mon, 1 Dec 2008 14:26:

夜は雨、ネット不調

最近では早朝からの仕事が多く、夜戻ってからしかメール確認ができていません。今日で 3 日間連続でハバラナ（トリン

コ・バティチームとの合流場所）までの同行が入っていました。

夜は雨が降っているせいか、ネットの調子があまりよくありません。明日は早めにオフィスへ戻れることを祈ります。

Tue, 2 Dec 2008 14:33:

10 日間連続で仕事

このところ 10 日間連続で仕事中です。このままだと今週末まで休みが取れそうもありません。今週末は少し体を休めたいです。

12 月に入り、ますます北の情勢が激しくなってきました。これからどうなるのか、予測ができません。

Fri, 5 Dec 2008 12:08:

13 日ぶりに休み

今日も早朝からハバラナへ行っていました。明日は 13 日ぶりに休みです。レポートを済まさないといけません、少しはゆっくりできたらと思います。寝不足を解消しなければ。



講演・討論会

＜いま、世界平和を創り出すために ガンジー、阿波根昌鴻に学ぶ＞

21世紀こそ平和の世紀にとの願いと裏腹に、イラク、アフガニスタン、スリランカ、パレスチナ、スーダンなど世界各地で暴力と死が続きます。2008年末には経済躍進を続けるインドで、大規模テロが起こりました。そのインドと米国との原子力協力協定をきっかけに、核不拡散条約（NPT）体制は事実上崩壊し、北朝鮮、イランを含めて核兵器の拡散が不可避とされつつあります。

米国に新しい大統領が就任し、世界の「変化」への期待もあります。しかし、世界に展開する全米軍の最高指揮官となるバラク・オバマ氏は、選挙戦を通じてアフガニスタンでの「テロとの戦い」に向けて戦力の転換・強化を訴えてきました。日本に対して、洋上給油に止まらない、より踏み込んだ戦争加担を求めてくる可能性があります。

こうした状況下、日本国憲法が謳う軍隊によらない平和創りを一歩でも進めるため、インド独立を非暴力抵抗運動で勝ち取ったガンジー、そして沖縄駐留米軍に対し自らの土地を守る闘いを「耳から上には手をあげない」ことを守ってリードした阿波根昌鴻の思想を、いまこそ活かしていかなければなりません。

阿波根昌鴻にその生涯の最後の日まで深く接し、国際NGOの平和活動に加わってきた大畑豊＜非暴力平和隊・日本＞共同代表に、自らの活動経験を踏まえて「いま、世界平和を創るために」わたしたちはなにができるか、すべきかを話してもらいます。

日時：2009年1月24日（土曜日）15：00～17：00

場所：カトリック市川教会（市川市八幡3-13-15 Tel:047-322-5488）

主催：宗教と平和を考える市川宗教者の会

代表 外谷悦夫 秋山 胖（市川市市川1-24-7 電話047-322-7331）

資料代：200円

講師：大畑豊・非暴力平和隊/日本（NPJ）共同代表

講演概要

- ・ 非暴力平和活動の支柱：ガンジーと阿波根昌鴻の実践
- ・ 国際NGO、＜非暴力平和隊＞の活動
- ・ 日本国憲法第9条と私たちの生活。

「国際理事報告」

NP 国際理事 阿木幸男

1. 新国際ディレクター：

ドナ・ハワード共同代表、シモネッタ・ピットルガ理事を中心した「選考委員会」が、4人の候補の最終面接中。12月23日の国際理事(電話会議)で経過報告が為され、1月末までには、新国際ディレクターの誕生の予定。

4月中旬に予定されている国際理事会(スペインのバルセロナにて)で、国際理事が集い、新国際ディレクターとNPの現状と今後の活動について、検討する予定。

国際理事は「無給」、理事会で承認された視察訪問、会議、業務、以外は、通信費、活動費は「自己負担」が原則。

スペインでの国際理事会参加の航空賃代、交通費は、先進国からの国際理事は自己負担。ラテン・アメリカ、アフリカ、インド、パキスタン、などからの国際理事に対しては、NPが渡航経費を負担する。

2. スーダンの現地状況調査

ヨーロッパのNPメンバー団体を中心に提案された「スーダンの現地状況調査」を実施することを、国際理事会で決定。

スーダン西部のダルフル地方での紛争は現在も進行中。

反政府勢力の反乱を契機に、アラブ系の「ジャンジャウイード」と呼ばれる民兵

組織とスーダン政府軍による、非アラブ系住民への大規模な虐殺が行われ、地域の村落の破壊に発展。

約20年間の内戦などによって、周辺国に避難した難民は50万人に上るといわれている。

2008年7月14日、国際刑事裁判所(ICC)はダルフル地方の紛争に関して、大量虐殺や戦争犯罪の容疑でスーダンのオマル・ハッサン・バシル大統領(64歳)の逮捕状を請求したと発表。

ICCによる、現職国家元首の逮捕状請求は初めてである。

NPとしては、現地調査し、現地で非暴力で紛争解決をめざす団体、グループが存在するかどうか、NPの現地での非暴力介入を求める声、動きがあるかどうか、慎重に調査し、調査結果を国際理事会に報告。今後の関わり方を検討、決定の予定。

3. スリランカ・プロジェクト報告

サイモン・ハリス(イギリス)が12月1日にカントリー・ディレクターに就任。エレン・フレナリ(米国)が前財政担当のフィオナ・ムサナ(ウガンダ)の代わりに、財政業務を担当することに。

(編者注記：エレンはスリランカ・プロジェクト創設時の責任者補佐ジャン・パッション夫人)

すでに次の機関、団体から活動資金援助を受ける； ” B R E A D F O R

THE WORLD”（ドイツ）、ZIRIK（ドイツ）、BMZ（ドイツ）、” ECHO”（ベルギー）、フランス外務省、スリランカのオランダ大使館、UNDP（国連）、NTT・スリランカ。

リタ・ウエブ（米国）は11月まで、スリランカ・プロジェクトの代表代理を務めていたが、ハリスの就任に伴い、「代理」の任をとかれ、東部に移動。トリンコマリ地区とバティカロア地区を担当する。

現地の状況は一層、深刻になりつつあると報告が届いている。例えば、

ジャフナ地区は洪水、電力供給問題、通信網のトラブルに直面している。周辺地域で、政府軍とLTTEとの戦闘が激化しており、多くの住民は避難、移動を強いられている。ケニヤとエジプトからのフィールド・メンバー2名が現地との連絡に尽力している。

ジャフナの「リハビリテーション・センター」には、安全のために多くの女性、子どもたちが滞在している。夫たちが、深刻な脅威にさらされており、身の安全のために、裁判所に出頭する者も少なくない。男たちの多くはジャフナの刑務所に囚われの身である。

NPはユニセフ（国連機関）から資金援助を受けて、現地の”SAVE THE CHILDREN”と協力して、子どもたちと住民への安全な輸送の提供と日常

生活のニードに対応する活動を展開している。

東部では、モンスーン豪雨の被害が多である。道路の寸断、通信網の切断、など、深刻な状況にある。

バティカロア地域では、暴力事件が頻繁に起きている。特定の人物を狙ったと思われる殺人事件が多発している。住民たちは、そうした殺人、暴力事件に抗議して、各地で集会、デモを行っている。

「NPバティカロア・チーム」の調査では、10月以降、誘拐事件、若者の武力グループへの強制的な新兵募集が増大。市民の行方不明者の数も増加している。

11月29日（土）には、バティカロア地域に「戒厳令」がだされた。

トリンコマリーの状況

編者追記

ニューズレター25号でご報告したが、9月、トリンコマリーの行政府代表（GA）からトリンコマリー事務所を閉鎖するよう勧告があった。理由は治安も回復しNPの必要性が無くなったとのことである。本部からティム・ウオリスが訪し、GAと会談し11月中旬、3ヶ月間の猶予期間を得た。その後は、ハバナラ（トリンコマリーとバティカロアを結ぶ交通の要路）から支援の予定。トリンコマリー要員の状況については徳留報告を参照のこと。12月初め、庭野平和財団の2年度助成金の送金要請により、平和委員会活動支援のため60万円を送金した。

パレスチナ 1948・NAKBA の製作に携わって

NPJ 会員 中原 隆伸

NPJ 会員の皆様 こんにちは。 中原と申します。 このところ、今号も含めれば3つのニュースレターに連続して投稿させて頂いています。 どの位の人数の方が読んで頂いているか正直わかりませんが、一人でも多くの方が興味を持って読んで下さっていることを祈りながら今号も書いています。

さて、前回のニュースレターでは、自分が働いていた NGO である MEND (Middle East Nonviolence and Democracy : 中東非暴力・民主主義センター) の事について触れさせて頂きましたが、その最後を「次回のニュースレターもまたエルサレムから寄稿できればいいのですが…」といった内容で締めくくりました。 誠に残念ながら、編集長の大橋さんに原稿を送ってすぐの10月24日、ヨルダンとイスラエル／パレスチナの国境でイスラエル政府から2度目の入国拒否を受けてしまい、止むを得ず日本に帰国することになりました。

入国出来ない現状をしっかりと見つめて、自分は日本で何が出来るかを模索していた中で、以前 NPJ を通して知り合った田中泉さんを通して広河隆一さんという方の事務所での仕事を紹介して頂きました。 ご存知の方も多くいらっしゃると思いま

すが、広河さんは大学を卒業後、イスラエルにあるキブツ（財産・生活の共有など、社会主義の理想をベースに作られた共同農場）に渡りました。 キブツ滞在中、今は廃墟と化している、元はパレスチナの村だった場所にそのキブツが建てられていた事実を知り、「ホロコーストを経験したユダヤ人のキブツが、パレスチナ人の村の土地に建てられている」ことに大きな衝撃を受けます。 このことをきっかけにイスラエル・パレスチナ紛争に関連した作品を発表するようになり、その後はパレスチナ問題のみならずイスラエルのレバノン侵攻、チェルノブイリ、スリーマイル島原発事故等も取材し多くの著書・作品を発表する傍ら、現在は月刊誌「DAYS JAPAN」の編集長も勤めています。 また NPJ の賛同人にもなられています。

今広河さんは、ご自身の40年近くに渡るイスラエル・パレスチナ紛争関連の取材で得た写真・映像・データ等を「パレスチナ 1948・NAKBA」としてまとめる作業をしていて、自分もその製作チームの一人として11月上旬の帰国当日から働き始めました。 自分の興味にぴったりの仕事を、まさに「渡りに船」という例えそのままの絶妙のタイミングで紹介してくれた田中さんには本当に感謝しています。

写真1万枚以上、1000時間以上の映像、それだけの膨大な量を「アーカイブス版」

及び「劇場版」として編集技術者、英語・ヘブライ語・アラビア語のネイティブ・スピーカーらと作業を行っていく訳ですが、より包括的な「アーカイブス版」でも DVD にして 30 巻、時間を総合計すると 45 時間ぐらいになります。現在は「アーカイブス版」の英語版の作成に取り掛かっています。仕事の性格上、広河さんの取ったインタビュー（ヘブライ語やアラビア語も含む）の中でもさらに厳選されたものを常に視聴するため、せつかくある程度身についた二つの言語を忘れないようリマインドしつつ自分のイスラエル／パレスチナ紛争に関する知識が増えるわけで、ある意味いいこと尽くめの職場だと（個人的に！？）思っています。



「軍事封鎖されたパレスチナ自治区に食料搬入の許可を出すよう求めるデモで、イスラエル兵に対し 1 時間以上も V サインをかかっていたパレスチナ女性。ヨルダン川西岸地区。パレスチナ（2002 年 4 月）」

さて、ここからは NPJ のニューズレターの紙面を借りての宣伝なのですが（あつかましくて申し訳ありません）、「アーカイブス」日本語版は 12 月 26 日に発送が開始される予定で、現在も予約を受け付けています。また以前メーリングリスト上でも広報をさせて頂きましたが、2009 年 1 月 8 日（木）には NAKBA の完成記念試写会が普段 NPJ でもよく使用する文京シビックセンターであります。1 月 8 日には自分も間違いなく行くことになると思いますので、ご興味をお持ちの方は是非会場でお会いしましょう！（詳細は <http://nakba.jp> でご覧ください）



「オマル・フセイン。1948 年に難民となる。その後何度も故郷に戻ろうとして逮捕され、ジェニン難民キャンプに送られた。2002 年 4 月のイスラエル攻撃で家屋を完全に破壊された。ジェニン。ヨルダン川西岸地区。パレスチナ（2004 年 4 月）」

N P Cとの交流などについての報告

理事 奥本京子

.....

先日、韓国・ソウルへ学会出張した機会に、N P C（非暴力平和隊・コリア、朝鮮語では「平和の波」と呼んでいるN G O）の共同代表である、N P Jにもおなじみのパク・スングョン氏と会うことができました。N Pを軸とする日本・コリア交流の今の状況を、会員の皆さんにお知らせしたく簡単な報告をさせていただきます。といっても、例えば、2009年度の交流会議については、具体的なことは未だ何も決まっていません。2006年11月のソウルでの第1回交流会議、2007年8月の関西での第2回交流会議、そして、2008年3月22日のソウルでの第3回目の会議を受けて、N P J・N P C共に、2009年のどこかで（順番から考えると日本での）第4回目の開催に意欲を示しています。この交流会議の企画は今後の大きな課題です。また、パク氏の他に、韓国を中心に市民運動や紛争転換・修復的正義などの研究を進めている人たち2人とも同席することになりましたが、パク氏らはソウルを中心にして、非暴力直接介入や非暴力コミュニケーションなどのトレーニングを、N G O活動家や一般市民を対象に精力的に行っており、トレーニングを受けた人たちが次のムーブメントを作っていくための仕掛け作りをしているとのことでした。私自身、日本における＜非暴力介入＞を軸とするネットワーキングに関心をもっているので、近い将来、そういったより幅広いつながりを模索し、その中にN P東北アジアを位置づけることも重要だと再確認した次第です。日本・コリアの交流に関心をお持ちの方は、ぜひ、事務局までご連絡ください。一緒に進めていきましょう！

インド滞在記

李 亘

立命館大学法学部政治行政専攻

NPJのみなさま。お元気でしょうか。NPJでインターンをさせて頂いている、李亘です。今、私はインドのチェンナイにありますがマドラス大学の政治公共行政学部という所に留学しています。これは、9条世界会議のシンポジウムにお招きしたラム・マニバナン先生から、留学のお誘いを受け、先生の下に転がり込むという形で実現したものです。普段、私はマニバナン先生の下でスリランカについて勉強すると共に、マニバナン先生の受け持たれている「紛争解決学」の授業を受講しています。「非暴力的介入」についてマニバナン先生の下、1本の論文を仕上げることが、当面の目標です。

先日、ムンバイでテロが発生しましたが、こちらチェンナイではあまり影響はありません。テロ発生後、チェンナイのターゲット系列のホテルの前を通りましたが、いつも通り、適当な警備をしており、（大丈夫かいな？）と思いました。ただターゲット系列全体として警備は手薄らしく、チェンナイの日本総領事館の方も、テロ発生前から「ターゲットは使わない」と仰っていました。ムンバイテロの詳細は分かりませんが、こちらの新聞報道によると、ムンバイテロを主導したテロリストの中には私と同じ21歳の間人も含まれていたそうです。パキスタンの田舎で生まれ育ったであろう彼らが、ムンバイという大都会の最も高級なターゲットホテルにテロを仕掛けたのです。彼らの目にムンバイや、豪華絢爛なターゲットホテルがどのように写ったのでしょうか。彼ら

が、故郷で普通に生活していれば、決して見ることの出来ない世界であったことに間違いありません。

私はチェンナイで、物乞いを押しのけてショッピングセンターに入り、そこで「ケンタッキー・フライドチキン」などを食べるがあります。ショッピングセンター前の物乞いは決して、「ケンタッキー」など口にするには出来ません。物凄い懸隔が私と物乞い、そしてケンタッキーの間にはあるのです。彼らの目には私やショッピングセンターがどのように映っているのでしょうか。その光景は彼らにとって心地良いものではないはずです。物乞いたちとケンタッキー、パキスタンの田舎とムンバイのタージホテル。次元は全く異なりますが、なんとなく、似ているような気がします。そして、テロへ繋がる人々の「怒り」が分かるように思います。もちろん、テロリストたちを擁護したり同情したり、している訳ではありません。

インドの南にあるチェンナイは、スリランカ情勢を考える上で、非常に面白いところです。チェンナイという街はタミール・ナードゥ州の州都でもあるのですが、「タミール・ナードゥ」の名前の通り、この州の多くの住民はタミール人なのです。スリランカでは少数派であるタミール人が、海を隔ててすぐの所にあるインドのタミール・ナードゥ州ではスリランカの多数派あるシンハラ人以上の人口を持っています。インドのタミール人もやはり「同胞」であるスリランカのタミール人のことを気にかけているようで、最近のスリランカ情勢の悪化を受け、多くのデモがチェンナイで行われています。また、歴史的に見ると、インドのタミール人がスリランカのタミール人を助ける

べく、タミール・ナードゥ州が独自の行動を取ったり、インドの中央政府に圧力をかけた、といったこともあったようです。

日本では、アフリカの勉強をしていた私ですが、以上のように「地の利」からインドではスリランカの勉強をしています。しかし、アフリカの紛争もスリランカの紛争も、紛争それ自体の暴力性が非常に強いように感じています。「自分たちと違う奴らは徹底的にやっつけてやる」といった風潮です。ちょうど、今のスリランカ政府のやり方はそうでしょうし、アフリカの多くの紛争（シエラレオネやルワンダなど）でもその様な印象を受けます。スリランカとアフリカ（といっても広いですが、アフリカの紛争はこうだと、一般化することはよくありませんが）共に植民地支配を受けた場所ですが、人々は植民地支配の持つ暴力性や非人道性を自分たち紛争に蘇らせているのではないかと考えています。

インドでの日々は充実しています。何より、紛争学の勉強をしつつ、自分のいる建物の外では、スリランカに対するデモを行われていたり、食うに困るような人が居る、ということは、日本の恵まれた、清潔で無駄のないエアコンの効いた教室で授業を受けたり、議論をするよりも、正直に、謙虚に研究が出来る気がします。そして何より、最近「インド人化」し、何かと適当でルーズになってきている私をいつも笑顔で見守り、研究室に置いてくれているラム先生に感謝しています。

□□□□□□□□□□□□□□□□

非暴力平和隊に参加して

学んだこと

アメリカのサブプライム問題に端を発するグローバルな経済危機が進行する中、アメリカ次期大統領に民主党のオバマが国民の圧倒的支持を得て選出されたことは一筋の光明として多くの人たちに少なからぬ希望を与えたのではないかと思う。次期大統領に確定した後、オバマは直ちに本格的な政権移行チームを編成、次期政権の主要補佐官、閣僚を決定し、大統領就任後、直ちに直面する諸問題への対応が実行できる体制を整えつつあるように思える。一方、オバマは諸問題の根源の深さ、広さ、複雑さに鑑み、対策に関する発言は次第に慎重を期しているように思える。

ブッシュの8年間でアメリカの支配力は大きく低下したとは言え、政治、経済、社会面でのアメリカの影響力は依然として強く、グローバル社会はオバマ政権移行後のアメリカの動向に注目している。オバマが足元をしっかりと見つめて着実に改革“CHANGE”を実行に移すことを期待したい。オバマの政権運営にとって最大の課題は、アメリカ国民の支持をいかに維持しつつ改革を実行することであり、オバマにとってもアメリカの国益が最優先されるであろうことを忘れてはならないと思う。

さて、このような時に二つの記事が目にとまった。私がニューズレターに寄稿しようと思ったのは、もし私が非暴力平和隊に関係していなかったならば、二つの記事ともそれほど強い関心を持つこと

なく見過ごしていただろうということ、私のようなごく平凡な一般市民でもこのような問題に関心を持ち、それなりに反応できるようになった自分を顧みて非暴力平和隊に感謝したいとの気持ちからである。

■ 12月3日、ワシントン共同通信発「日米関係の将来は集团的自衛権にかかっている」との見出しで書かれていたアメリカ・エンタープライズ研究所 (American Enterprise Institute) の報告書の要約である。報告書の題名は「自由の確保…新しい時代における日米同盟」である。オバマの対日政策については、アジアを重視するという漠然とした方針以外は不明であるが、民主党はクリントン政権時代もジャパン・パッシング、中国重視の姿勢をとってきた。アメリカ・エンタープライズ研究所は共和党系の有力なシンク・タンクと言われているが、この報告書をまとめた一人は大統領選挙戦で共和党候補を支持したとはいえ民主党のリーバーマン上院議員のスタッフである。さて報告書であるが、見出しだけで内容が想像されたとおり、現平和憲法のもとでは米国や他の連合パートナーが攻撃されても日本がそれに対し防衛支援することができないので、日本やその他地域にある米国の海空軍基地への攻撃や米国に発射されたミサイルを日本が防御できるよう集团的自衛権に関する制約条項を取り除くよう提案している。そして、次期戦闘機としてF-22Aを日本に提供し、見返りとして日本は武器輸出禁止条項を緩和し

て強固な軍事産業を構築するよう提案、また、日本も米国にならって日本版国家安全保障会議を作り国家レベルの政策立案を集権化することを提案している。最後にイラクへの貢献、在日米軍の再編問題等により当面日米関係は緊張が高まると指摘している。

日本の政治が混乱を深めている現在、憲法改正問題は棚上げされているようだが、いずれ政治が安定すれば、この報告書に書かれている方向への舵取りが動き始める可能性は十分あると思う。心して動向を注視していきたい。

■ 12月3日、日本を含む100カ国以上がノルウェーのオスロに集まりクラスター爆弾禁止条約が合意をみた。ノルウェーが合意の当日最初の批准国となりラオスが続いた。合意した国々は順次批准する見通しである。

新聞によれば、1965年以來のクラスター爆弾による被害者（死者、負傷者）は10万人に達し、そのうち98パーセントが民間人であった。ラオスではベトナム戦争時の1964年から1973年の9年間、平均すれば8分間隔でクラスター爆弾を満載したB-52爆撃機一機が爆弾を投下したといわれる。この禁止条約は5月28日、アイルランド・ダブリンで開催された国際会議で参加111国が条約（案）に合意したもので、各国が保有するクラスター爆弾を8年以内に廃棄することになっている。

この条約合意が画期的出来事とされるのは、米国、ロシア、中国、インド、パキスタン、イスラエルなどクラスター爆弾の主要製造国や保有国が不参加であるにもかかわらず、有志国とNGOの主導によって進められた点にある（オスロ・プ

ロセス）。[注：オスロ・プロセスは、1999年、有志国とNGOの主導によって実現された対人地雷全面禁止条約発効を継承するものであるが、対人地雷全面禁止条約の推進者の一人はジョディ・ウィリアムズ女史（アメリカ/1997年ノーベル平和賞受賞）であった。]

ノルウェー政府関係者やNGO（300以上のNGOからなる連合）代表者たちは、大量製造・保有国が不参加である点については残念に思うが決して失望はしていないと将来に希望を託しているようである。5月、幕張で開催された9条世界会議に参加する予定であったジョディ・ウィリアムズ女史は、このダブリンでの国際会議の直前であり、会議の主催者として訪日が無理となったが、同じく基調講演したマイルド・マグワイア女史（北アイルランド/1976年ノーベル平和賞受賞）は来日の後、ダブリンに飛んで国際会議に参加された。非暴力平和隊は事務局の一員として9条世界会議に主体的に関わり、非暴力平和隊自身も自主企画の分科会の一つを主催した。非暴力平和隊の活動が、細い糸かもしれないがノルウェーで調印されたクラスター爆弾禁止条約に繋がっていることに勇気をいただき、今は本当に小さな活動であるけれども確かな自負をもって歩みを進めていきたいと思う。

終りに：オバマは尊敬する人物として二人を挙げた。ガンディーとマルティン・ルーサー・キングである。非暴力平和隊はガンディーの非暴力の理念と実践の構想を継承するものであり、マルティン・ルーサー・キングはガンディーの非暴力に学び公民権運動を指導した。この点でも、オバマ大統領に期待するところが大きい。

非暴力平和隊・日本 2008年の活動・イベント

月日時	イベント・会議	開催場所	主催・講師など	備考
1月	COLLANVO ふくしまに参加（展示と団体紹介）		県内全域に理解者開拓の第一歩（ふくしま非暴力平和ネット）	鞍田東
3月	講演会	（相馬市）	同上	鞍田東
3月30日（日） 14:00~16:00	「非暴力による平和創造を考える」会	北九州市 日本基督教団 小倉日明教会	講師：安藤、前田	川辺希和子、 賛助会員、 会員数名入会
3月22日 15:00-22:00	NPJ/NPC 第3回交流会議	ソウル、 NPC 事務所	安藤、奥本参加	
5月5日 16:00-18:30	「紛争地で活かす9条」	幕張メッセ会議室301B	9条世界会議・自主企画 ワークショップ	非暴力平和隊・日本
6月14日 13:00~15:30	「地域紛争への非暴力介入の課題と可能性」	日本平和学会 「2008年度春季研究大会」 分科会発表	非暴力平和隊のスリランカでの5年間の活動評価	大畑、大島、 大橋
7月9日（水） 18:30~20:50	「スリランカ民族抗争の非暴力的な解決」	総評会館	講師：中村 尚司 （龍谷大学、PARC 共同代表）大畑、 阿木	大竹財団と 共催
8月4日 18:00~	NPJ 交流会 in 岡山	国際交流センター	NP の活動報告と意見交換、懇親会	安藤、前田、 大橋
8月5日 18:00~	NGO 非暴力平和隊の実践に学ぶ ~国際紛争に 非武装何か出来るか？	いわき市文化センター	・非武装の PK0」 をテキストに ふくしま非暴力平和ネット	鞍田東
9月28日（日） 13:30~18:00	紛争地における NGO の役割と可能性	国立オリンピック記念青少年総合センター	講演：谷山博史氏 （JVC代表理事） 報告：これからの	非暴力平和隊・日本

		—	NGO 平和維持、平和構築活動を考える —スリランカでの『非暴力平和隊』活動報告	
11月8日	新宿集会	「ワーキングプアー、貧困と民族紛争」		阿木
12月17日 (水) 18:10~20:30	紛争地での市民介入 —非暴力平和隊の挑戦—	清泉女子大学 大学院	地球市民学専攻：公開合同セミナー (2008年度第3回) 第4回 1月14日、 第5回 2月18日	話題提供： 大畑 豊

NPJ 理事会、総会

月日	時間	会	場所
3月15日	13:00~15:00	理事会	文京シビックセンター3F
3月15日	15:00~17:00	総会	文京シビックセンター3F
6月14日	18:00~20:00	理事会	白山事務所
9月20日	11:00~13:00	理事会	白山事務所
12月14日	14:30~17:00	理事会	白山事務所

東京月例会

1月25日
2月29日
4月8日
5月15日
6月27日
7月29日
8月27日
10月28日
11月28日

ニューズレター発行

第21号	2008年1月25日
第22号	2008年4月8日
第23号	2008年6月27日
第24号	2008年8月27日
第25号	2008年10月28日
第26号	2008年12月12日

2008 年の出来事 【スリランカ・プロジェクト】

月日	項目	備考
1月2日	停戦合意破棄	スリランカ政府、LTTE との2002 年合意の停戦合意を破棄。停戦合意は16 日に失効、スリランカ停戦監視団 (SLMM) も同日までに撤退
1月7日	NPSL 方針	NPSL の活動継続を内外に表明
2月4日~11日	阿木、大橋訪ス	“トリンコマリー平和委員会” 支援活動状況等を視察
3月30~31日	トリンコマリーでワークショップ開催	庭野平和財団助成金による平和委員会第1 回ワークショップ (1泊2日) 実施。3つの民族コミュニティから20名参加。
3月10日	バティカロア県選挙	14年ぶりの地方選挙： NPSL はPAFFREL とともに選挙監視協力。日本大使館の畑中一等書記官 NPバティカロア訪問
5月10日	東部州選挙	(バティカロア、トリンコマリー、アンパラ各県) NPSL はPAFFREL とともに選挙監視協力
5月	国連人権委員会	スリランカ、国連人権委員会の改選で落選。
6月27日	庭野平和財団助成金	“トリンコマリー平和委員会” 支援第2 年度助成金決定。
7月23日	責任者交代	ローランド (病気療養中) →フィオナ・ムサナ (ウガンダ)
8月	NP 活動の選択と集中	優先4 分野：児童、若者、家族の支援/国内難民支援/コミュニティ間ネットワーク作り/人権擁護
9月初旬~中旬	幹部来訪	メル・ダンカン/ティム・ウォリス： ・NPSL 全スタッフとの単独会議 ・現地体制支援、国連、米国大使館等に資金要請 ・トリンコマリー拠点に関するGA との折衝
9月21日	国際平和記念日 (国連決議) 行事参加	国際平和記念日に、カタクンディ (バティカロア地区：タミル・ムスリム紛争多発地域) の様々な行事を支援。 (カタクンディでは5 月末に一発触発の危機があった)
9月末	アンジェラ・ピンチェロの受賞	プログラム・マネージャー、アンジェラ・ピンチェロ、オタワ市より「53人ピース・メーカー賞」受賞
10月	資金調達	ドイツ、スイス、UNDP、キリスト教財団等に補助金を申請
10月	責任者交代	フィオナ (ウガンダ) →リタ・ウェブ (米国：代理)
	内戦の状況	政府軍、LTTE の本拠地に迫る一方で言論統制を強化
11月4日	トリンコマリー事務所の今後	9月、GA (県知事) よりNP トリンコマリー/ムトゥール事務所閉鎖の要請を受けていた。ティム・ウォリスがGA と面会、3か月の猶予期間獲得
12月1日	責任者交代	リタ・ウェブ→サイモン・ハリス (英国国籍)
12月20日	徳留由美さん帰国	1年間の任務を終えて帰国 (予定)

2008 年の出来事 【ミンダナオ・プロジェクト】

月日	項目	備考
3月7日~12日	阿木国際理事訪比	コタバト、ミンダナオ中央地区訪問。
3月14日~18日	平和行進に同行	ミンダナオ→マニラ行進。
7月	和平合意	政府・MILF「先祖伝来の土地問題」に関し合意
8月1日	JICA 職員交代	JICA 派遣国際監視団メンバー交代(菊池外務省課長)
8月4日	和平合意不調	最高裁、和平合意の正式調印に反対
8月8日	戦闘の勃発	北コタバト地域で武力衝突、10万人が避難。
9月	幹渉訪比	メル・ダンカン来訪。
10月	戦闘激化・拠点退避	中央ミンダナオ・チーム、コトバト市に移動
	増員計画	10名ほどの補充・増員を計画(資金調達如何による)。
	資金調達	EU、英国、オランダ、UNICEF に補助金を申請
11月11日	幹渉訪比	ティム・ウオリス来訪

【グアテマラ・プロジェクト】

■ 2008年2月、目的を達成し1年間の緊急対応プロジェクトを終了。

2008年の主な出来事 【NP本部、事務局関係】

月日	項目	備考
1月1日	NP 財政緊急事態	クリスティーン、メルが給与返上。他の専従スタッフも2月1日からレイオフ、給与の削減実施を決定
6月1日	プログラム・ディレクター交代	クリスティーン・シュヴァイツァー→ティム・ウオリス(元共同代表)
6月	新事務局長人選開始	メル・ダンカンの後任。ブラッセル勤務:(メルはミネアポリス拠点で戦略計画、資金調達など担当予定)
6月	国際理事会内に3委員会設立	「執行委員会 EGC」「財政委員会」、「ミッション達成委員会」。阿木は「財政委員会」に参加。
6月24~25日	国連プレゼンテーション	ニューヨークで国連、ユニセフ関係者、大口寄付団体にNP活動のプレゼンテーション・レセプション
6月	国際理事交代	アフリカ: ジョン・スチュワート→ジョビワット
8月	NP 宣伝ビデオ	2008年末完成予定で宣伝用ビデオ取材開始。
8月	NPの財政	依然として不安定状態にあるが、英国、スウェーデン、オーストラリア政府機関から初めて補助金獲得
	新事務局長人選	最終候補4名に絞り、2009年初に決定予定
10月	国際理事交代	欧州: マテオ→オウティ、中南米: テマック→サンドラ

非暴力平和隊の理念と活動に賛同・支援して下さる個人および団体を会員として募集しています。入会のお申し込みは、郵便振替、銀行振込、非暴力平和隊・日本ウェブサイトの「入会申し込みフォーム」をご利用下さいますようお願いいたします。

◎正会員（議決権あり）

- ・ 一般個人：1万円
- ・ 学生個人：3千円

* 団体は正会員にはなれません。

◎賛助会員（議決権なし）

- ・ 一般個人：5千円（1口）
- ・ 学生個人：2千円（1口）

・ 団体：1万円（1口）

郵便振替：00110 - 0 - 462182 加入者名：NPJ

* 通信欄に会員の種類を（賛助会員の場合は口数も）ご明記ください。例：賛助個人1口

銀行振込：三井住友銀行 白山支店 普通 6622651 口座名義：NPJ代表 大畑豊

* 銀行振込をご利用の場合は、お手数ですが電話・ファックス・メールのいずれかを通じて入会希望の旨、NPJ事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。

ウェブサイトからのお申し込み：<http://www5f.biglobe.ne.jp/~npj/nyukai.html>

編集後記：年の終りにニューズレターを発行することが出来たのは、一年を回顧し反省とともに翌年に向けての抱負と決意を新たにすることで良かったと感謝しています。お忙しい中ご寄稿ありがとうございました。今回もML上で会員の皆様からのご意見、ご感想、ご質問などをお願いいたしましたが、残念ながらご寄稿いただけませんでした。本誌を会員の皆様に身近な情報・意見交換の場としたいと思っておりますので次号にはぜひご寄稿いただきたいと思ひます。

NPJ, NPの2008年の活動をまとめてみましたが、紙面の関係から説明不足の点があり、ご理解いただけたでしょうか。新しい年の平和への高まりを期待しつつ。

非暴力平和隊 (NP, Nonviolent Peaceforce) とは……

地域紛争の非暴力的解決を実践するために活動している国際NGOで、非暴力平和隊・日本 (NPJ) はその日本グループです。これまで世界中の平和活動家たちが小規模な非暴力的介入について経験を積み、功を収めて来ました。NPはこれを大規模に発展させるために2002年に創設されました。

非暴力・非武装による紛争解決が「理想主義」でも「理想主義」でもなく、いちばん「現実的」であることを実践で示していきます。

